

## ティーンエイジ、ヤングアダルトの悪性腫瘍

(文責 小児科 渡邊健一郎)

小児科で何歳までの患者を診ますかと問われれば、一般的に15歳までということになっていると答える。しかし、勿論、単純に15歳で割り切れるものではない。悪性腫瘍については、ティーンエイジからヤングアダルト、つまり10歳から30歳までの年齢層に好発する疾患があり、それらはそれぞれ生物学的性質を一にしており、15歳以上と以下とで異なるわけではないからである。この年齢層では、リンパ腫の一種であるHodgkin病、骨肉腫、Ewing肉腫、横紋筋肉腫などの骨軟部腫瘍、胚細胞腫瘍の頻度が高い。また白血病、リンパ腫、脳腫瘍は他の年齢層と同様にみられるが、より高年齢で頻度の高い胃癌や肺癌といった所謂ガン(carcinoma)の頻度は低く、より若年でみられる、神経芽腫、Wilms腫瘍、網膜芽細胞腫、肝芽腫といった胎児性腫瘍(embryonal tumor)はほとんど発症しない。

欧米の統計では、思春期における悪性腫瘍の治療成績は、他の年齢層のそれに比べて概して不良で、過去と比べて成績向上の程度も低いと報告されている。この理由として、様々な要因が考えられている。

一つは、同様な腫瘍であっても、この年齢層で発症するものは、生物学的性質が悪いということである。例えば、横紋筋肉腫は乳幼児でも発症するが、ティーンに発症するものの方が、明らかに予後は悪い。思春期発症では、四肢に好発するが、疱巣型と呼ばれる組織型を呈し、PAX3-FKHRキメラ遺伝子が陽性となる例が多い。これらはいずれも強力な予後不良因子であり、乳幼児発症の横紋筋肉腫では、頻度が低いことが知られている。

また、この年齢の患者では、悪性腫瘍の診断が遅れることが多い。まず、本人が医者に行きたがらない。より年齢の低い小児であれば、親が異変に気がついて受診させられるが、思春期になれば親と入浴することは通常ないし、普段会話をすることさえ億劫になることもある。病変がひとにみられたくない部位にあれば猶更である。さらに、仮に受診した場合にも、もともとこの年齢層では悪性腫瘍が稀であるため、専門外の医師の頭には、なかなか悪性腫瘍が思い浮かばないこともおこり得る。骨肉腫は、患部の疼痛、腫脹が代表的な症状であるが、これは当然外傷など他の原因でもおこりうる。患者が、スポーツをしていて、打撲をしたなどという病歴があれば、より見過ごされる可能性が高くなる。また、皮下腫瘤で発症した悪性腫瘍の場合には、漫然と経過観察されたり、

画像など十分な検索を行われぬまま、適切なマージンをとらず切除され、おまけに分子生物学的予後因子等をさらに検索するには不適切な標本しかのこっていないという場合もある。

他には、治療として特に内服薬を使用する場合にコンプライアンスが悪いこと、臨床試験への参加率が低いことも、思春期悪性腫瘍治療成績が他の年齢層に比べるとよくなっていない一因と考えられている。

そもそも思春期は、子供から大人に向かい精神的にも、肉体的にも劇的な変化を遂げる時期で、親子関係をはじめとする人間関係や進路の問題など、非常に葛藤の多い時期である。このような、ただでさえ大変な時期に、悪性腫瘍という生命を脅かす疾患に罹患することになると、手術や化学療法、放射線療法という比較的負担の多い治療を受け、長期の入院を強いられることになる。さらに、治療終了後も再発や晩期障害の不安があり、進学や就職、保険加入、結婚、出産の問題や、社会のなかでどの様に生きていけばいいのか、実に多くのことを考え、悩まざるを得なくなる。

こういった、思春期特有の状況に対応でき、しかもこの年齢層に好発する悪性腫瘍の治療に十分な経験のある体制をもつ施設は、実はなかなかない。このことが、思春期悪性腫瘍に対する治療成績の伸びが悪いことの、大きな要因ではないかという人もいる。特に固形腫瘍では、集学的な治療が効果的に行われることが最も重要であり、そのためには、患者のニーズにあった disease-oriented な治療チームを組むことが最も効果的と考えられるからである。元々小児病棟は、どちらかという乳幼児向けにつくられており、成人の病棟では、より高齢の患者が多い。前述のように好発する疾患も違えば、病棟の雰囲気や環境、スタッフの患者に対する態度も、必ずしもティーン向きではない。どちらも、思春期のがん患者にとって、一番居心地のよい最適な場所ではないのかもしれない。このため、欧米のがんセンターの中には、Adolescent Oncology Unit という、専門の部門をおいているところもある。

さて、本院では、小児からティーンエイジの悪性腫瘍患者に対して、骨軟部腫瘍については整形外科と、脳腫瘍については脳外科と、さらに放射線科と小児科が一つのユニットとなって診療を開始している。入院中の患者はもちろん、外来においても、小児脳腫瘍外来、小児骨軟部腫瘍外来を協同で立ち上げたところである。また、現在施行している骨軟部腫瘍に対する多施設臨床研究プロトコールの多くは、対象年齢が30歳未満となっている。我々小児科としても、年齢や診療科の枠にとらわれず、患者のニーズにあった disease-oriented な質の高いガン診療を、他科の先生方、様々な部門のスタッフの方々と展開していきたいと考えている。こうした方向性の中で、思春期からヤングアダルトのがん患者を、どこで誰がどんな形で診るのが一番いいのか、考えていきたい。